

中学校美術科における文化遺産としての伝統工芸のカリキュラム ーデザイン活動に着目してー

佐 藤 真 帆

千葉大学・教育学部

Curriculum Development for Traditional Crafts as Cultural Heritage in Lower Secondary School Art Lessons in Japan: Focusing on Design Activities

SATO Maho

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は、生徒の美術文化を理解し創造する資質能力を育てるための中学校美術科のカリキュラム開発を目的とし、デザイン活動を活かした伝統工芸のカリキュラムにおける生徒の学びについて探究した。近年、持続可能な社会の担い手の育成のため芸術教育の重要性が高まっている。国連教育科学文化機関は、文化の多様性に関する世界宣言を示した。また、学習指導要領美術科には、生徒の伝統や文化に対する知識・理解を深め、美術を通じた国際理解、美術文化の継承と創造への関心を育て、文化的に多様性であることを尊重できる資質・能力を育てることが示されている。開発した伝統工芸のカリキュラムを実施し、データを収集し、質的に分析した。結果として、発想や構想に関する細やかな支援により、生徒の主体的な学びを促すことができたと考えられる。しかしながら、批評的思考の育成を鑑賞と表現で活発に行うためのさらなる検討が必要である。

This study aimed to develop a lower secondary school art curriculum to enhance students' competencies in understanding and creating art and culture through a traditional craft project emphasising design activities. In recent years, art education has become increasingly important for the development of leaders in a sustainable society. The United Nations Educational, Scientific, and Cultural Organization adopted the Universal Declaration on Cultural Diversity in 2001. In addition, the Course of Study for Arts indicates that students should deepen their knowledge and understanding of traditions and cultures, develop international understanding through art and an interest in the inheritance and creation of art and culture, and acquire competencies that respect cultural diversity. A traditional craft curriculum was implemented, and data were collected and analysed qualitatively. The results suggest that explicitly including design activities in the curriculum fostered comprehensive support for developing students' design ideas and encouraged embodied learning. Regarding cultural understanding, further consideration is needed on how to incorporate the development of critical thinking into the curriculum so that students become aware of their cultural backgrounds and perspectives.

キーワード：文化遺産 (cultural heritage) ・ 伝統工芸 (traditional crafts) ・ デザイン活動 (design activities)

1. 問題と目的

本論では、生徒の美術文化を理解し創造する資質・能力を育てるために、美術科におけるデザインの視点を活かした文化遺産としての伝統工芸のカリキュラム開発について、生徒の学びに着目して報告する。国際連合教育科学文化機関は、文化の多様性に関する世界宣言の中で、文化遺産と創造性について、第7条「創造性の源泉としての文化遺産」で次のような立場表明を行った。

Creation draws on the roots of cultural tradition, but flourishes in contact with other cultures. For this reason, heritage in all its forms must be preserved,

enhanced, and handed on to future generations as a record of human experience and aspirations, so as to foster creativity in all its diversity and to inspire genuine dialogue among cultures.

(UNESCO, 2001)

創造は文化的伝統の根源から生まれるが、他の文化との接触によって繁栄する。このため、あらゆる形態の遺産は、人類の経験と願望の記録として保存、高められ、将来の世代に引き継がなければならない。そうすることで、多様性に富んだ創造性が育まれ、文化間の真の対話が促される。(筆者訳)

第7条は創造性と文化的多様性のために文化遺産の保存を奨励している。これに応えるように学習指導要領

連絡先著者：佐藤真帆 msato007@chiba-u.jp

(2017)は、国際化やローバル化に伴う複雑な地球規模の社会問題を解決することができる児童・生徒の資質・能力を育むことを主な教育目標としている。そして、伝統や文化に関する教育の充実を教育内容の主な改善事項の一つとしている。美術科教育においては、生徒が日本の伝統や文化に対する理解を深め、様々な国や地域の美術や文化との共通点や相違点に気づき、美術を通じた国際理解と美術文化の継承と創造への関心を育てることが期待されている(文部科学省, 2017)。

しかしながら、イギリスと日本の工芸教育の比較研究では、日本の美術科における発想や構想、いわゆるデザイン活動の不在が指摘されている(Sato, 2010)。さらに、工芸の指導では、文化理解に関連して批評的思考を育成するような鑑賞や表現活動が行われていないことが指摘されている(佐藤, 2022)。また、美術科教員養成課程の学生の中には文化遺産や伝統工芸の理解が自分の国の文化について知るという点において重要だと感じている一方で、現代の生活との関連においてその価値を見出せないと考える者もいた(Sato, 2020)。

生徒の国際理解と美術文化の継承と創造への興味・関心を育て、持続可能な社会の担い手に必要とされる資質・能力を育てる美術教科教育はどのようなものなのだろうか。本稿では、これまで美術教師の視点から検討してきた伝統工芸の指導の可能性を、生徒の学びから探る。特に、多様性に関連して文化遺産としての伝統工芸の継承と創造の課題をデザイン活動に注目する。伝統工芸の指導の課題であるデザイン活動を伝統工芸の授業カリキュラムに取り入れることで、生徒の美術文化を理解し創造する力を育てる方策を検討する。

2. 研究の背景

伝統工芸の指導の課題の一つとして、美術科では工芸技術の習得が強調される一方で、発想や構想を含むデザインの指導が十分に行われていないことが報告されている(Sato, 2010)。Normanによると、「教育におけるデザインは多くの分野の一つであり、より挑発的に言えば、デザイン思考を含む教育モデルであり、デザイン思考は芸術に関連した創造的な発明プロセスに固有の思考よりも一般的である」(2001, p. 91)と説明している。デザイン思考は、人々が物をつくるための独自のアイデアを開発することを促す思考の様式である(Sato, 2010)。本論文で使用する「デザイン」は、デザイン思考を含む活動のことを指すものとする。デザイン活動は、生徒が伝統工芸を独自の視点で理解し、創造していくことを支援する上でも重要であると考えられる。また、Sennett(2008)は社会におけるクラフトマンシップについて、熟練の知識の習得だけでは不十分であり、新しい問題を解決したり、より良い作品を生み出したりするような文脈で生かされるべきであると述べている。工芸職人は、材料、道具、工程を巧みに操る能力を駆使して、新しいものや独創的なものを作る。したがって、デザイン思考と熟練の知識は、文化の伝承と創造にとって必要不可欠なのである。工芸教育においては、生徒の技術とデザインの両方の力をカリキュラムに位置付け育成する必要がある

ある(Sato, 2010)。

デザインに関する指導の手立てとして、生徒の発想や構想を促すために明確なテーマを出発点として示すこと、適切で馴染みのある文脈を作成すること(Owen-Jackson, 2002)、制作過程の初期段階での拡散的思考を促すこと(Rutland, 2005)などが効果的であることが報告されている。また、分析的思考や批判的推論を含む自己評価は、制作の過程で能動的なプロセスとして考慮される必要がある(Owen-Jackson, 2002)。

美術科教員養成課程でのデザイン活動を意識的に取り入れた伝統工芸のプログラムでは、デザインとつくる活動の両方を通して、学生たちは次第にその伝統工芸の特徴に気づき、独自のアイデアを活かして作品を生み出していった(Sato, 2020)。また、それぞれの工芸品は社会的文脈の中でよりよく理解され、それに応じて評価されるべきである(Chin, 2011; Irwin et al., 1999; McFee, 1995)。そのため、鑑賞活動の充実は重要である。本研究では、カリキュラム開発のため、以上のことを考慮して伝統工芸の授業を計画、実施し、生徒の伝統工芸の学びの可能性について検討した。

3. 研究方法

本研究では主に、生徒への質問紙調査、伝統工芸の授業観察を実施した。調査への協力者は、公立中学校Nの美術科教師、及びその授業に出席した2年生205名である。調査は事前に書面にて承諾を得て実施した。実施期間は2020年9月から11月頃までであった。

始めに生徒の伝統工芸に対する態度、経験や考えについて理解するために簡易な質問紙調査実施した。筆者が教員養成過程で開発した伝統工芸のプログラムを、研究協力者である中学校美術科教師が生徒の実態を考慮し、様々な工夫をして中学校美術科の授業として再度計画し、実施した。制作と鑑賞活動の授業を観察し、生徒の取り組みの様子や作品をフィールドノートと写真で記録した。本調査での授業は学校現場の状況に合わせて実施したため、筆者は可能な範囲で授業観察を行ない、観察できなかった授業については授業担当の美術科教師から聞き取りをした。

4. 授業の概要

実施した授業は、筆者がこれまで美術館での幅広い年齢層向けに行なったワークショップや教員養成コースで開発、指導してきた背守りを題材とした。背守りはテキスタイルに分類されるが、テキスタイルは諸外国の状況と比較して、これまで日本の美術科教育では多くは扱われてこなかった(Sato, 2010)。多様性や社会包摂の観点から、生徒が様々な美術文化を学ぶ機会を用意する必要がある。

背守りは、新生児や小さな子どもの着物の背中、衿の下に縫い付ける飾りである。これは、悪霊や病気から幼い子どもを守る意味合いがある(佐治ら, 2014)。大人の着物には背中に縫い目があり、背後から忍び寄る悪霊から身を守ると考えられていた。しかし、子どもの着物

一枚の布で作られるため背中の縫い目がなく、同じ様な守りの意味を与えるために、わざと縫い目を入れる習慣が生まれた。背守りには、シンプルな縫い目のもの、縁起の良い模様、珍しいもの（動物や中国の玩具など）を刺繍したものなどがある。使われる技術は、主に返し縫いである。現代社会では、お宮参りなどで子どもに着せる着物に見られることがある。また、Tシャツなどに施されるなど現代社会でも形を変えて実践されているようだ。

授業担当の美術科教師によって作成された活動の主な目標は、①「背守り」について興味関心を持ち、祈りを形に、オリジナリティのあるデザインを考えることができる、②刺繍の方法について理解し、丁寧な作業で作品化することができる、であった。さらに制作後の鑑賞活動の目標は、学年の仲間たちの作品を、①どのような祈りを込めたか、②それを表現するためにどのようなデザインを考えたか、の2点を踏まえ、じっくりと作品を鑑賞することができる、と示されていた（フィールドノートより）。研究の目的を考慮し、文化理解、デザインと創造性に着目した内容となっている。

主な活動の流れは、①背守りの説明、②自分の祈りや願いをテーマに背守りをデザインする、③自分でデザインした背守りを絵の具バッグに縫いつける、④生徒作品の鑑賞であった。

5. 結果と考察

(1) 生徒の興味、関心と経験

伝統工芸の授業の実施前に参加生徒205名に対して簡易な質問紙調査を行った。別の中学校で行った質問紙調査では、生徒らの日本の文化遺産や伝統工芸への興味、関心は高いものであった（佐藤、小橋、江藤、2022）。本調査では、「非常に興味がある」と「ある程度関心がある」を合わせた「関心がある」は7割台後半、「全く関心がない」と「余り関心がない」を合わせた「関心がない」は1割強となっている（表1）。

表1 日本の美術文化への興味関心

回答	人数 (%)
非常に興味がある	46 (22)
ある程度関心がある	112 (55)
どちらとも言えない	36 (18)
余り関心がない	9 (4)
全く関心がない	2 (1)

また、伝統工芸への興味関心は、「非常に興味がある」と「ある程度関心がある」を合わせた「関心がある」は6割台、「全く関心がない」と「余り関心がない」を合わせた「関心がない」は1割弱となっている（表2）。

日本の伝統工芸と聞いて何か思い浮かべることができた生徒は8割（84%）である。具体的には、陶磁器に関する回答が45あり、多くはないが、有田焼、信楽焼など具体的な名前も挙げられている。続いて扇子や団扇（18）、

表2 伝統工芸への興味関心

回答	人数 (%)
非常に興味がある	43 (21)
ある程度関心がある	89 (43)
どちらとも言えない	55 (27)
余り関心がない	17 (8)
全く関心がない	1 (0)

手ぬぐい（15）があげられた。ガラス工芸（11）、だるま（11）、水墨画（10）、お面（9）、漆器（8）、こけし（7）、寄木細工（7）、木造建築（6）、着物や和服（6）、浮世絵（6）、江戸切子（6）、織物・染物（6）、箸（5）、風鈴（5）があげられている。回答数が5つ以下のものの種類は数多くあり、和紙、金工品、木工品という言葉とともに、数多くの具体的な工芸品名があげられた。水引細工、竹細工、組紐、ねぶた、提灯、甲冑、硯など文具、仏壇、飴細工などである。日本では純粋芸術を意味する美術が紹介されたのは明治以降であるため、美術と工芸という概念や括りで伝統的に作られてきたものを区別することが難しい。このことは、本調査の生徒の回答が絵画や建築から日用品まで様々であったことから、現在の子どもの美術工芸の認識も多様であるということが言えるのではないだろうか。

伝統工芸を作る人について「知らない」が9割強である（表3）。「知っている」と答えた生徒の中には具体的に知っている人として「とんぼ玉を作る人」、「新潟県で織物をしている人に会いました」、「和紙職人」、「水墨画家、荒井恵子」、「雪舟」、「小学生の道徳の教科書で出ていた」などがある。

表3 伝統工芸を作る人

回答	人数 (%)
知っている	11 (5)
知らない	194 (95)

日常生活で伝統工芸にふれる機会については「ある」が4割弱で「ない」が6割程である（表4）。「ある」と回答した生徒は、扇子、畳、玩具、風鈴、漆器、木工、手拭い、茶道道具などをあげている。

生徒の日本の美術文化及び伝統工芸への関心は高く、伝統工芸と聞いてほとんどの生徒が何かしらをイメージすることができていたことから、授業題材として伝統工芸は生徒が主体的に取り組むことができるものとなるの

表4 伝統工芸にふれる機会

回答	人数 (%)
ある	76 (37%)
ない	129 (63%)

ではないだろうか。しかし、作っている人についての知識や日常生活で触れる経験は限られているため、工芸技術の習得だけでなく、工芸が制作され、評価されてきた社会文化的文脈の中で理解していけるような指導の工夫が必要である。

(2) 背守りの授業実践

①授業の導入

授業の導入では、題材である背守りについて歴史的背景について資料を基に説明し、その際に実際に着物を見せ、生徒が興味・関心を持てるような工夫をしていた。背守りの授業は既に教員養成課程で実施していたため、大学生が作成した伝統的なモチーフに沿って作られた背守りや学生がデザインした背守りを参考作品として示した。また、授業者は自身で背守りをデザインし、制作したものを参考作品として紹介していた。その際に、自身がどのように着想を得て制作したのかというプロセスも紹介していた。本授業では背守りを子どもの着物に縫いつけるのではなく、生徒の絵の具バッグにそれぞれの祈りからデザインした背守りを刺繍することとした。当初、授業者は美術科の授業で、通常は家庭科で扱う内容である刺繍の活動をすることや、生徒が興味・関心を示さないのではないかとということが心配であると話していた。しかし、授業では実際に心配していたことが起こることはなかった。また、美術科教師へのインタビュー調査(佐藤, 2023)から、鑑賞や工芸技術の指導への不安などが明らかになっている。教師は学校美術のゲートキーパーとなる重要な役割を担っていることから、改めて美術科教師教育の重要性を確認した。

②デザインシート

教師が用意したワークシートを使って、アイデアを出し、広げていくデザイン活動が指導されていた。ワークシートの名前は「デザインシート」で、5項目の記述やスケッチのスペースから構成されていた。それらは、「1. 背守りを知って、どのようなことを感じましたか?」(記述させる)、「2. どのような祈りを込めますか?」(記述させる)、「3. あなたの祈りはどのような形で表すことができますか? アイデアマップで発想を広げましょう」(マインドマップを作成させる)、「4. アイデアスケッチ(2つ以上)を考えましょう」(5×8cmの枠のなかにスケッチさせる)、「5. デザインのこだわりポイント」(箇条書きで記述させる)であった。そして、デザインのポイントとして、次のようなことがデザインシートに書かれていた。

デザインのポイント:

刺繍で表現することを忘れない。そのため、細かすぎないデザインがよい。

刺繍糸は1色でもいいし、数色使ってもよい。

なぜそのデザインなのか、語れること。

5×8cmの枠に収まるデザインにすること。縦横は自由、正方形なら5×5cm。

(デザインシートより)

生徒のデザインシートには、教師が赤色のペンで生徒

の記述をまるで囲んだものや、教師の短いコメントなどが見られた。筆者が授業観察した授業では、生徒が教師にワークシートを確認してもらう姿が見られた。そこからは、デザインを決定していく過程での教師と生徒の対話があることが見て取れた。

デザインシートの「1. 背守りを知って、どのようなことを感じましたか?」という問いには、デザインが多様であることやそれには意味があることに驚いたことなどが書かれていた。授業の導入で、背守りの歴史などの背景やテーマ(祈り)について知る機会があったことで、見方が深まっていると考えられる。また、ある生徒は、自分が幼少期に着た服に縫い付けてあったことを記述しており、教師と筆者を驚かせた。以下、デザインシートにあった生徒の記述である。

すてきな考え方だと思ったし、自分でもぬってみたいとおもった。いろいろな表現方法がキレイでおもしろい。刺しゅうがせんさい。(S1)

「背守り」という言葉はしらなかったけど、私が赤ちゃんの時に着ていた服にぬってありました。そんな意味があったんだって、おどろきました。一つ一つの形に想いが込められていて、想像力が豊かだと思った。(S2)

日常生活の中で受け継がれてきた文化であることや、現代ではあまり見かけないものであることから、今回の授業のように文化的文脈で伝統工芸を理解することは、生徒の発想や構想を促すことにつながるのではないだろうか。

③制作

絵の具バッグにデザインした背守りを刺繍する授業を観察することができた(図1)。授業では生徒たちは熱心に取り組んでいるように見えた。ワークシートのデザインした背守りを薄紙に写し取り、バッグへ貼り付け、薄紙ごと刺繍していき、縫い付け終わったら薄紙を剥がしていた。各クラス数名ではあるが、返し縫いと玉留めができずにいる生徒が見られたが、彼らは教師や友達に聞いたり、生徒同士で教え合ったりしていた。口頭での説明だけでなく、やって(縫って、結んで)みせる姿や自分がやっているところを見せて確認してもらう姿が見

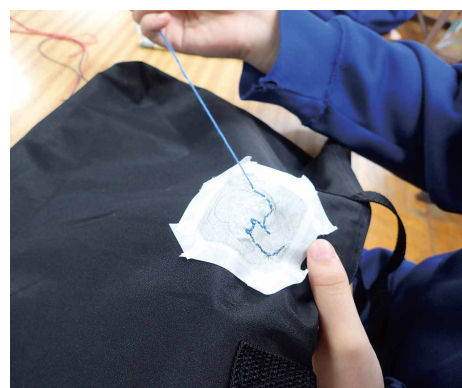


図1 制作の様子

られた。縫い始めがわからず、数人で頭を寄せ合って確認しながら作業する姿もあった。制作の授業の観察では、生徒に直接、デザインの意味について話を聞くことができ、どの生徒も自分のデザインの説明をすることができた。また、観察や聞き取りから、いずれの生徒も自分なりに「祈り」を形にしていることがわかった。さらに深い学びを促すために、与えられたテーマから自分なりに工夫して発想、構想し、表すプロセスについて、生徒同士が共有し評価し合うような活動が必要なのではないだろうか。

④生徒作品

生徒作品のデザインは主に、日本の伝統的なモチーフやテーマをもとに自分なりにデザインしたものと、テーマである祈りから自分なりにデザインしたものに分けられた。今回の授業では、必ずしも伝統的なモチーフ等を使うことを条件にしていなかったが、生徒作品の半数以上が何らかの伝統的なモチーフを自分の祈りにあわせて使用していた。どのデザインもそれぞれの生徒なりに祈りを色や形、技術を工夫して表現しようとしていることが、作品および作品カード（祈りやデザインについて記述したもの）からわかる。

以下、伝統的なモチーフを用いた生徒作品と作品カードに書かれた「祈り」と「デザインについて」の記述である（図2、図3、図4）。他には、自分の「祈り」に関係する伝統的なモチーフとして竹や瓢箪を使ったものがあった。



図2 生徒作品72

図2の作品カードには、祈りについては「マイペースに万年健康」とあり、デザインについては「糸の色は色々ある日々を表し、デザインである亀には長寿の意味があり、のろのろとしているのでマイペースでありながらも長く健康に生きていこう、という願いが込められています。」と記述があった。亀をモチーフに選んだ生徒は他にも数名いたが、デザインは様々であった。

図3の作品カードには、祈りについては「これからも健康ですごしていききたいという思いと元気に成長していききたいという祈りです。」とあり、デザインについては「麻の葉には元気に成長するようにと折りがこめられていて、花みtainな形が素敵でこのデザインにしました。ピンク色で元気を表して下の青色の部分はただ自分一人では成長できないから、家族や周りの人たちがいて

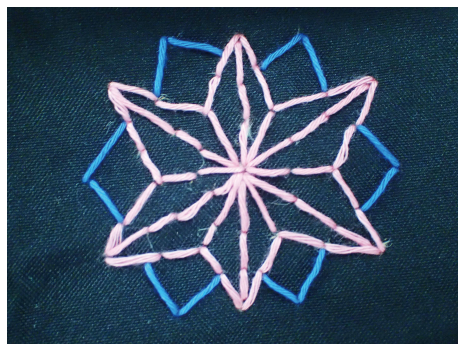


図3 生徒作品83



図4 生徒作品140

成長できるといいなと思って、麻の葉だけでなくオリジナルでつけたしました。」と記述があった。麻の葉の紋様は伝統的に手拭いや着物にも見られるが、本授業ではこの作品のみであった。

図4の作品カードには、祈りについて「成功する」、デザインについては「成功するという意味を込めるのに何度倒しても起き上がるだるまをつくりました。いろいろな色を使ってたくさんの成功を表現しました。」と記述があった。

テーマである祈りから自分なりにデザインした作品は多様であった。以下、生徒作品と作品カードに書かれた「祈り」と「デザインについて」である（図5、図6、図7、図8、図9、図10）。



図5 生徒作品61

図5の作品カードには、祈りについて「健康でいられるように」、デザインについては「薬草をテーマにしました。左の葉は少しいびつで、病気の動きを、右の葉は

きれいなカーブをつかって健康で元気になった自分を表しました。外側は緑色で、内側の線を黄緑にしたことで、明るさがでたし外側と内側の区別がつきやすくなりました。」と記述があった。授業観察中、この作品の制作者である生徒は、自分が病気がちなのでこのテーマにしたと話していた。



図6 生徒作品70

図6の作品カードには、祈りは「ものごとを色々な方向から考えられる人になりたい。」とあり、デザインについては「このデザインはたくさんのとらえ方ができるようにしました。例えば、これを、花だと感じる人や何かの模様だと感じる人もいます。この一つの背守りから、いろいろなデザインを想像できるようにしました。そのため、ピンク色のみとなっています。みなさんはどのように思いますか。」と記述があった。

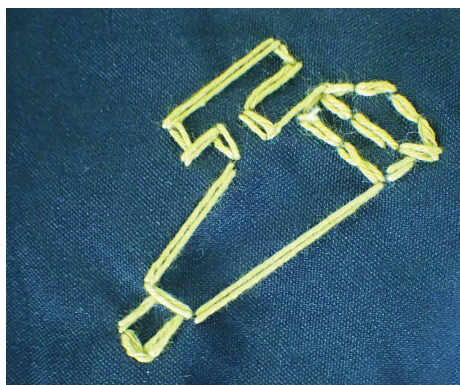


図7 生徒作品104

図7の作品カードには、祈りについて「新しい発見がたくさんある人生を送れますように。」とあり、デザインについては「望遠鏡をイメージして描いた。レンズの部分の楕円形をぬうことに苦労した。二重になったがレンズの部分のみ少し立体感があるのもよいと思った。」と記述があった。

図8の作品カードには、祈りについて「目標にむかってまっすぐ進んでいけるように」とあり、デザインについては「弓矢の矢は、飛ばしたらまっすぐとんでいくので、今自分には三つ目標があるので、三つ合わせて一直線に飛ぶようにデザインしました。」とあった。図5、図6、図7、図8の作品は、テーマに沿って造形的な表現を自

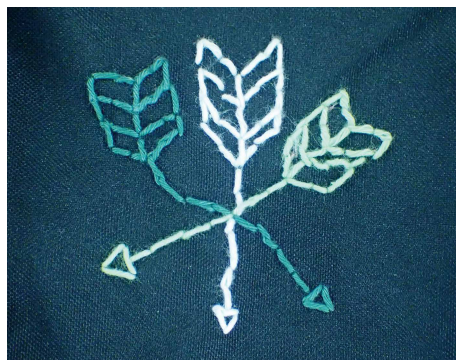


図8 生徒作品119

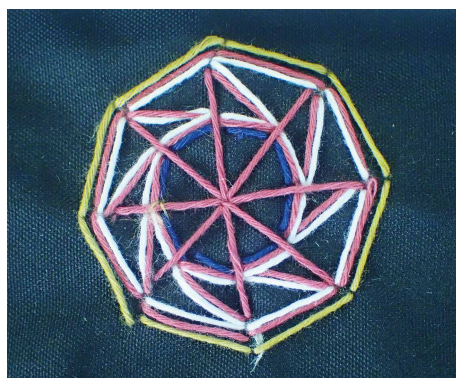


図9 生徒作品100

分なりに工夫していることが作品と記述からわかる。

生徒作品の中にはコロナウイルス感染拡大の終息を願うものも見られた(図9、図10)。作品のデザインには、中学生の日常生活を取り戻したいという気持ちが込められていた。

図9の作品カードには、祈りについて「コロナが早くおさまるように」とあり、デザインについては「全色のふちの中の形は私達の『日常』を表しています。真ん中の赤いふちはコロナを表していて、コロナによって私達の『日常』が制限されてしまっているのを表しました。」と記述があった。一見、伝統的なデザインを模したようにみえたが、デザインについての記述により、よく考えられたデザインであることがわかる。

図10の作品カードには、祈りについて「最近、コロナの影響で、祭がなくなり、花火を見ることや友達と花火

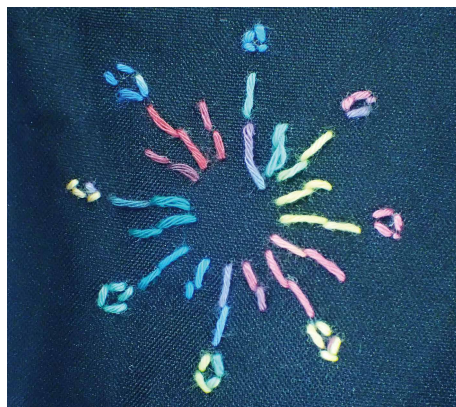


図10 生徒作品113

をすることがなくなったので、早く花火をみられるようになってほしいと思って作った。」とあり、デザインについては「今一番コロナがなくなってほしいと思い、コロナで行くことができなかったのは、祭だと思った。祭といえば、花火だと思ったので花火にしてみた。花火ひとつひとつの色を変えることによって、自分や他の人の祈りを表している。外側の丸でその思いを一つにし、コロナをみんなでのりこえることをあらわしている。」と記述があった。

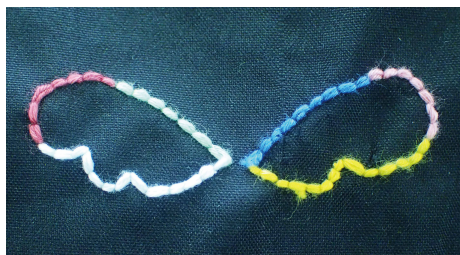


図11 生徒作品126

図11の作品カードには、祈りについて「早くコロナが落ち着いてほしい。落ちたら、いっぱい部活したり、友達や家族と遊びに行ったりしたい!」とあり、デザインについては「なぜ天使の羽なのかは、願いを叶えてくれるといえば神様だと想像したからです。神様だったらどんなお願いでも叶えてくれるイージだったからです。でも神様は抽象的なので、天使の羽にしました。ポイントは、一色の糸だけじゃないところです。コロナが落ち着いてほしい。いっぱい部活したいなど色々な願いがあるので多色の糸で表現しました。」と記述があった。

生徒作品と作品カードからは、自分の作品テーマに沿って造形表現が工夫されていることがわかった。その中で伝統的なモチーフを使ったデザインが複数見られた。また、独自のデザインのテーマとしては、身近な願いや将来への願いといったものがみられた。古い時代に子どもの命を魔物などから守りたいという祈りが込められた背守りと重なる。また、この授業では、コロナウイルス感染症の終息を願い、日常生活を取り戻したいという祈りが込められた作品が生まれた。背守りという伝統工芸によって生徒の声がかたちになったことで、見過ごされてしまうかもしれない生徒の声に出会うことができた。この経験は、私にとって伝統工芸のオルタナティブな指導の可能性について改めて考えるきっかけとなった。

一方で、背守りは子どもの着物に縫いつけるものであるため、絵の具バッグに縫い付けたこの活動は、本来の文脈から切り離されて理解される可能性がある。この点に関しては、指導の際には注意が必要である。ただし、背守りの社会文化的な価値を自分たちなりに理解し、「祈り」という古来のテーマで制作したことによって、自分たちの生活と伝統工芸を結びつけて理解できたのではないだろうか。絵の具バックは生徒にとっては身近な学校での生活用品であるため、大切に制作することができたとも言える。丁寧な文脈の紹介がこの課題を解決するのではないだろうか。

背守りは、着物に縫い付けていたことから、縫い目の

幅が広い。しかし、多くの生徒作品は細かな返し縫いや、西洋刺繍の技術を使ったものであった。比較的長めのシンプルな直線を巧みに組み合わせたデザインは、仕立て直しをすることのできる着物に施す背守りの特徴である。特別な技術が使われているわけではない背守りではあるが、素材や道具を含む技術とデザインの関係を丁寧に見る（分析する）という視点も鑑賞活動で必要だったのではないだろうか。

⑤ 鑑賞活動

作品を完成させた後に、鑑賞活動を1時間実施していた。授業の冒頭では、鑑賞活動の目標が示された。鑑賞活動の目標は「学年の仲間たちの作品を鑑賞し、どのような祈りを込めたのか、それを表現するためにどのようなデザインを考えたのか、この2点を踏まえ、じっくりと作品を鑑賞する。」であった。次に、鑑賞ワークシートを使った鑑賞活動が行われた。ワークシートは『『祈りを形に』鑑賞シート』というタイトルで、学年の仲間の作品を鑑賞し、示された項目に作品の作者名と選んだ理由を書くというものだった。示めされた項目は「この作品すてき!センスを感じます」、「なんて美しいデザインなのでしょう!」、「なんてかわいいデザインなのでしょう!」、「気になる作品!ぜひ作品の意図を詳しく聞きたい!」、「祈りがよく伝わってくる!」などの8項目であった(フィールドノートより)。生徒は友達と自由に作品を見て周り、鑑賞シートに記入していた。テーマとデザインの関係について考える観点を示す工夫がされていたと言える。

6. まとめと今後の課題

本調査では、生徒が文化遺産や伝統工芸に高い興味関心を持っていることを確認することができた。また、生徒が知っている伝統工芸の種類は多岐にわたっていた。日本の伝統工芸は純粋芸術の範疇に収まらない実に多様なものである。様々な伝統工芸を題材として取り入れることは、生徒の深い文化理解の体験を促すことにつながるのではないだろうか。特に本調査では「背守り」という生活の中で受け継がれてきた伝統工芸を題材とすることで、その作品が作られ、評価された文脈を知り、その中で主体的に理解しようとする態度や力を育成することの必要性を確認することができた。

独自の高い技術が特徴の日本の伝統工芸を文化遺産として扱うカリキュラムにデザイン活動を明確に位置付け、取り入れた。そこで、技術とデザインが関連していること、その関係に注目することもまた深い理解への一つの視点となることがわかった。

伝統工芸のカリキュラムにおけるデザイン活動の指導のため、明確なテーマを出発点として提供すること、適切で馴染みのある文脈を作成すること(Owen-Jackson, 2002)という工夫を、背守りから「祈り」をテーマとするという形で取り入れた。結果として、この古来のテーマが生徒の発想や構想を促した。そして、そのテーマから生まれた生徒作品を通じて、移りゆく文化、受け継がれていく伝統を見て取ることができたとは言えないだろ

うか。また、制作過程初期で拡散的思考を促すこと（Rutland, 2005）については、デザインワークシートに取り入れ、結果として、数々のユニークな作品が生まれた。さらに、教師の丁寧な生徒との対話は、生徒が自信を持って自分の考えを表現し、広げていくことにつながったのではないだろうか。制作の過程での能動的なプロセスとしての自己評価（Owen-Jackson, 2002）については、デザイン活動だけでなく文化理解という点においても重要であるが、本調査ではこの点に関して事前の議論が不十分だった。特に文化遺産としての伝統工芸の学びに関して、自分の文化的背景やそれに影響される見方や考え方に自覚的になるために、批評的思考の育成を鑑賞と表現の両方で実践することが必要であり、さらなるカリキュラムの検討が必要である。

謝 辞

本研究の実践にご協力を賜りました中学校の関係者の方々には、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 美術編. 日本文教出版.
- 佐治ゆかり・夫馬佳代子・鳴海友子・三瓶清子 (2014). 背守り一子どもの魔よけ (LIXIL BOOKLET). LIXIL 出版.
- 佐藤真帆・小橋暁子・江藤知香 (2022). 中学校美術科における伝統工芸の学習：生徒の日本の美術，文化，伝統工芸の理解，令和3年度千葉大学教育学部一附属学校園間連携研究成果報告書，千葉大学教育学部.
- Chin, C.D. (2011). Critiquing commonly available multicultural art education resources. *International Journal of Education Through Art*, 7(3), 299-313. doi:10.1386/eta.7.3.299_1

- Irwin, R., Rogers, T., & Wan, Y. (1999). Making connections through cultural memory, cultural performance, and cultural translation. *Studies in Art Education*, 40(3), 198-212. doi: 10.2307/1320862
- McFee, J.K. (1995). Change and the cultural dimensions of art education. In R.W. Neperud (Ed.), *Context, content, and community in art education beyond postmodernism* (pp.171-192). New York: Teacher College Press.
- Norman, J. (2001). Design as a framework for innovative thinking and learning: How can design thinking reform education? In E.W. Norman & P.H. Roberts (Eds.), *Design and technology educational research and curriculum development: The emerging international research agenda* (pp. 90-99). Loughborough: Loughborough University.
- Owen-Jackson, G. (Ed.) (2002). Teaching and learning about design. In G. Owen-Jackson. *Aspects of teaching secondary design and technology, perspectives on practice*. London: Routledge.
- Rutland, M. (2005). Fostering creativity in design and technology at Key Stage 3. (Unpublished PhD Thesis). Roehampton, University of Surrey. London, United Kingdom.
- Sato, M. (2020). Exploring Teaching Traditional Crafts and Heritage in Art Teacher Training in Japan. In G. Coutts, & T. Eça (Eds.), *Learning Through Art: International Perspectives* (pp. 349-378). Visen: InSEA Publications.
- Sennett, R. (2008). *The craftsman*. London: Allen Lane/Penguin Press.
- The United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO). (2001). *Universal declaration on cultural diversity*.